

④個に応じた指導の充実（少人数指導・習熟度別学習の取組）（磯子区・根岸中学校）

1 はじめに

根岸中学校はJR根岸駅のすぐ近くに立地し、創立60周年を迎える歴史と伝統ある学校です。現在は、各学年約80名、全校生徒をあわせても250名ほどで、各学年2〜3学級の小規模な中学校です。そこで、「小規模校であることを生かして、生徒一人ひとりを大切にす教育」を推進し、地域に見守られた学校づくりを行っています。平成18年度には通学区域特認校制度の指定を受けました（注1）。

根岸中学校の学校教育目標

- 21世紀をたくましく生きる人間の育成をめざして
- 1 健康な身体と思いやりの心を大切にします。
 - 2 進んで学ぶ意欲を大切にします。
 - 3 広い視野に立ち、内外の文化を尊重する態度を高くみます。

「一人ひとりを大切にす」ということは、「生徒一人ひとりが学校へ来ることに目的意識を持ち、楽しく、安心して学習に取り組む姿」にたどり着きます。部活動、休み時間など生徒の学校生活には多様な側面があります。しかし、生徒の学校生活の中心となるのは、やはり「授業」なのです。一日の学校生活の中で、そのほとんどは「授業」を中心とした学習の時間です。その「授業」の時間をどのように充実させていくかが学校生活全体を考えると重要なこととなります。学び、学びあい（生徒と生徒・生徒と教師）の時間に充実した満足感を感じることができれば、生徒にとって学校生活は楽しいものになります。そして、教科指導では「個に応じた指導の推進」を柱と考え、「少人数指導」「習熟度別学習」をキーワードとして授業の改善に取り組んでいます。

2

少人数指導と習熟度別学習

1 少人数指導

個に応じた指導を行うには、教員ができるだけ多く生徒と関われる条件整備を行わなければなりません。そのひとつの方法として、学習集団の人数を少なくし、生徒一人ひとりに行き届いた学習指導を行えるようにしました。教科の教員数により、実施できる教科が決まります。根岸中学校では、年度ごとに教科の組み合わせについて工夫をしながら少人数指導に取り組んでいます。国語、社会、数学、理科、美術、技術・家庭、英語で、少人数指導を実施してきました。

2 習熟度別学習

どの教科においても、個に応じた授業を行っています。が、実際に集団を習熟の程度に応じて分けて学習しているのは、数学です。単元の終わりに、見取りのためのテストを行い、「基本コース」と「発展コース」の希望調査をもとにグループ分けを行います。各グループの人数にばら

3 時間割の工夫

「少人数指導・習熟度別学習」を実施するに当たり、時間割の作成には工夫が必要です。単純に学級を2分割するような方法もありますが、根岸中学校は小規模校です。で、教科によっては担当教員が一人しかいません。そこで、例えば、2年1組の美術の授業を少人数指導で行おうとしても美術の教員は一人しかいませんので、2学級を3グループに分け、他の教科と組み合わせるなどの工夫をしています。「1学級38名×2」から「1グループ25名×3」の少人数の学習集団をつくりま

つきが生じることもあります。が、習熟の程度が同じ仲間と学習ができます。基本コースはていねいに、じつくりと学習に取り組めます。発展コースは問題を多く解き、考えを確認しあう学習に取り組みます。どちらのコースでも生徒の発言機会が増え、互いに教えあうような場面が見られます。

執筆者

中里 順子

横浜市立根岸中学校長

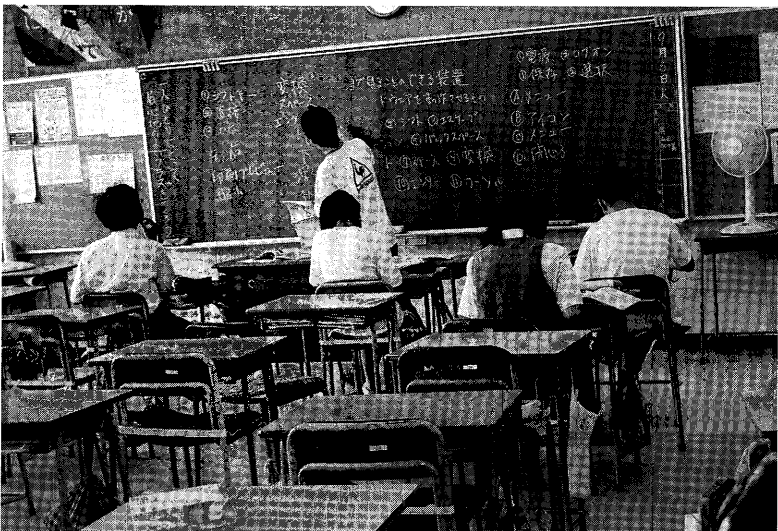
齋藤 稔

横浜市立根岸中学校副校長

（注1）

通学区域制度を前提とした上で、通学区の弾力化の一環として実施されている制度。各学校からの発意や施設状況等により教育委員会が指定する学校について、保護者とその通学区域特認校の有する特色の中で児童生徒に教育を受けさせたいという場合に、通学区域外から通学状況等の条件について考慮したうえで、その通学区域特認校への修学を認める制度。

少人数指導の様子（技術・家庭科）



す。教員の授業時数の増加は1学級分の1時間に抑えられます。教室の手配についても苦勞するところですが、少人数指導で使用できる余裕のある普通教室は2つあります。そのうちの1つは数学の授業で毎回使用しているため、少人数指導を実施している5教科（技術・家庭科は技術分野と家庭分野に分けて学習している）で実質は4教科+2領域となります（で使用できる教室は

3 学習形態の工夫の経緯

根岸中学校の「少人数指導、習熟度別学習」は平成10年度

1つしかない状況です。特別教室をもつ教科（美術、技術・家庭科など）と組み合わせることが不可欠です。普段使用している「普通教室の2クラス分」と「1つの余裕教室」「特別教室」を組み合わせ、授業をするスペースを確保しています。

から始まりました。1年生の2学級を、3つに分けて（A組、B組、C組）数学、理科、英語の3教科を組み合わせ、授業をいたしました。平成11年度以降は年度ごとに技術家庭科、数学、英語、保健体育のティームティーチングを活用して「少人数指導」を実施してきました。平成14年度からは1学年と3学年の数学について習熟度別学習を導入しました。

【平成15年度から開始した特色ある少人数指導の概要】

○平成15年度

数学科における「少人数指導・習熟度別学習」以外に、2年生で国語、社会、美術、技術・家庭、英語で少人数指導を行いました。3年生の家庭分野では保育の学習があり、近隣の保育園の協力を得て保育実習を行っています。受け入れ可能な人数も1クラスの人数では多すぎて実習にはならないため、学級を2つに分けた人数で実習を行っています。保育実習以外の生徒は、技術分野（なすの栽培）の学習を行っています。技術・家庭科では、学習内容により、少人数指導を有効に行っています。平成15年度の取り組みの工夫と実施の成果から、少人数指導の学習形態には、更に発展したものになりました。

○平成16年度

数学の授業を中心に「少人数指導・習熟度別学習」を行いました。3年生は、2学級を3グループに分け、他教科（英語・社会）と組み合わせることで、数学の1グループを更に2つのコースに分け、きめ細かい指導を行うことができました。

図1 2学級を3グループへ分けた場合

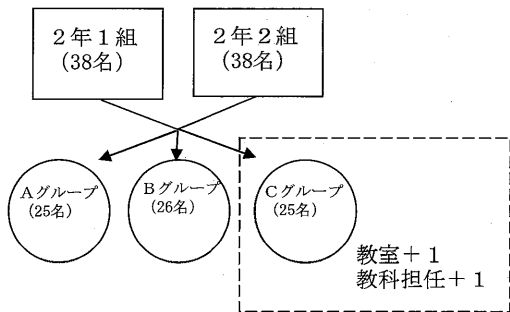
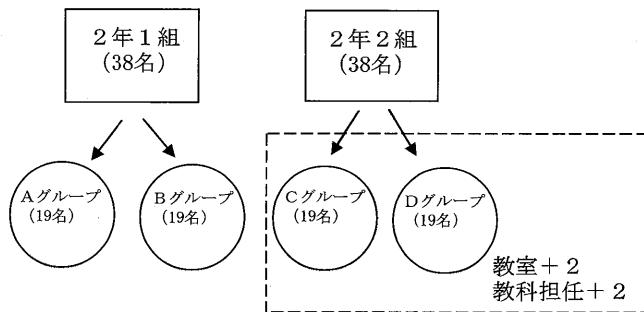


図2 学級を2分割した場合



他に、1年生の英語と技術家庭科でも、1学級を2つに分けた少人数指導を行いました。

○平成17年度

社会科の1年生で、少人数指導が行われました。1学級を2グループに分け、「地理的分野」と「歴史的分野」に分けて授業を行いました。1つの単元を終了することに「地理的分野」と「歴史的分野」の入れ替えを行います。技術・家庭科も同様に、1学級が「技術分野」と「家庭分野」の2つに分かれて授業を行うようにしました。

○平成18年度

2年生は、78名で本来2学級なのですが、独自に学級担任を1名増やして3学級にしました。1クラスあたり39名で2学級のところですが、3学級に分けて1クラスあたり26名で全ての授業を展開しています。また、1年生は「通学区域特認校制度」による入学生徒増により、1学級37名となりました。少人数指導・習熟度別学習・チームティーチングの実施に工夫をしながら取り組んでいます。

4

「少人数指導」
「習熟度別学習」の課題

根岸中学校の「少人数指導・習熟度別学習」は、平成10年度から続く取組のなかで培われてきました。各学年、各学級の生徒数に応じた「少人数指導・習熟度別学習」をキーワードに「個に応じた指導」を充実させ、根岸中学校の特色ある教育活動として位置づけられてきました。生徒一人ひとりの学習状況にあわせた学習指導を行うために「教材の研究」や「教具の工夫、開発」に取り組みながら、「楽しく、わかる授業」を目指しています。

「少人数指導」「習熟度別学習」の課題について考えてみます。

① 教員の一人あたりの担当授業時数の増加

学習形態を少人数指導にあわせようとすれば、教員の数を増やさなければなりません。それは現実的には難しい課題です。そこで、今いる教員で実施をしようとすれば、各教科の教員の担当する授業時数は当然増えてしまいます。しかし、学校生活の中心である授業の充実を考えると「少人数指導」は有効な手段です。「基礎・基本の定着」を図り、「学ぶ意欲」を育てるためには「少人数指導」を

積極的に取り組む必要があり、職員の共通理解により、授業時数が増えても「少人数指導」を継続していきたいと考えるようになりました。

② 学習集団の細分化

学級は単に生徒が集まった集団ではありません。生徒相互が学びあい、お互いを尊重することにより本当の学習集団として機能していくものです。「少人数指導、習熟度別学習」の学習形態を導入するにあたり、学級の学習集団が細分化されたことについては、懸念されてきました。「少人数指導、習熟度別学習」について子どもたちはどのように感じているのかアンケートの結果からみてみます。平成14年度の生徒のアンケートでは、「少人数の授業だとよ

くわかっていい」「クラスがばらばらになるので心配したけど、授業は集中できた」「クラスが違ってても授業が終われば、また教室でいっしょになれるのいい」という回答がありました。また、平成16年度のアンケートでは、少人数指導での学習について「大変よい」「よい」と回答した生徒が合わせて9割に達しました。アンケートの結果は「学習集団の細

分化」について懸念していた状況ではないようです。私たち教員も自信を持って「少人数指導」「習熟度別学習」に取り組んでいます。

しかし、何があっても少人数にすればよいというわけではありません。学級を中心とした集団での学びあひも大切にしながら、学習形態の工夫については、常に取り組んでいかなければならない課題です。

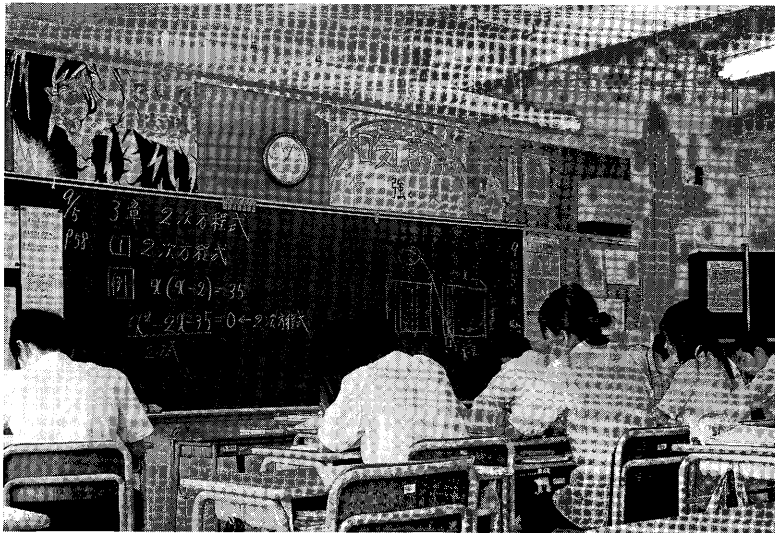
③ 習熟度別学習のコース分け

「習熟度別学習」についても課題があります。当初、生徒は基本コースで学習をすることに、抵抗感があるものと予想していました。しかし、実際にクラス分けの希望について調査を行うと、「発展コース」と「基本コース」では、「基本コース」への希望が多くなりました。総合的に判断して「基本コース」を希望した生徒のうち一部を「発展コース」へ移るよう促す場面もありました。

「少人数指導」から「習熟度別学習」へ移行する時の第一歩は特に重要です。根岸中学校では「習熟度別学習」は「個に応じた学習」ができる素晴らしい学習法であること、積極的に生徒や保護者に発信しています。基本コースに

表1 平成18年度の状況

	学級数	生徒数	1学級あたりの生徒数	少人数指導	少人数習熟度別学習	TT
1学年	3	109	36、37	英語 1学級を2グループに 技術家庭 (計6グループ)	数学 1学級を2グループに (計6グループ)	保健体育
2学年	3	78	26	選択教科A 学年を5グループに 選択教科B	数学 学年を3グループに	技術・家庭
3学年	3	90	30	英語 1学級を2グループに (計6グループ)	数学 1学級を2グループに (計6グループ)	技術・家庭
				選択教科A 学年を5グループに		
				選択教科B 選択教科C		



なった生徒への配慮をし、基本を確実に理解するために「ともに頑張ろう!」という意欲を喚起できるように雰囲気づくりをしています。

アンケートでは「ゆっくるといいねいに授業を進めてくれるのでいい」「発言をする機会が増えたので、同じような習熟の速さの人たちといっしょの方がいい」などの回答があり、「習熟度別」の学習形態は、効果を上げていると感じています。

5 おわりに

生徒を対象に実施した授業評価では、学習形態のほかに授業内容や教授法について質問項目を設定しました。この授業評価の結果を活用して、全ての教員がアクションリサーチを行いました。自身の授業が生徒にどのように受け取られているのかを見取り、よりよい授業を展開するために授業評価を活用しました。評価の内容は次の4項目（各4

段階評価）と記述式です。

- ① 授業は、楽しく分かりやすい授業になっていますか
- ② 授業で、学ぶ意欲が高まりましたか
- ③ 授業で、基礎・基本が身につきましたか
- ④ 教科ごとの設問

授業評価の内容を個別にみると、生徒の成長段階により内容のムラもありましたが、しっかりと回答してあります

たので、授業評価は今後の授業改善に十分活用できる資料となりました。「教科は嫌いだけれども〇〇先生の授業は楽しい」「みんなの意見がいっぱい出て楽しい」「授業が終わったたら、早く次の授業がしたいと思った。小学校の時はこんなことはなかった」などといった肯定的な意見も多くありますが、なかには「授業がつまらない」「テスト前に本文をばつと進める時がある」と言った私たち教師にとって耳の痛い意見もありました。その授業評価の内容を受けとめ、授業改善への手だてを持ち、具体的に取り組んでいきたいと考えています。

例えば、「授業の進度が速くてついていけない」と感じる生徒を少なくするために、授業の進め方を考えました。学習内容を減らすのではなく、授業展開を工夫することで、解決できるようにします。また、「活動を行うときの指示がわかりにくい」という評価から、生徒に説明するときには、できるだけ例を示し、言葉だけでなく、物や体を使って説明するなどの目標が見えてきました。

根岸中学校では「少人数指導・習熟度別学習」を行うことで学習形態に変化を持たせ「楽しく、わかる授業」を目指しています。当初は「少人数指導・習熟度別学習」を実施する上で「生徒が授業に集中できるように」といった「生徒指導面」からの発想が中心にありました。しかし、取り組みが進むにつれて「少人数指導・習熟度別学習」に応じた形で「授業内容の工夫」や「教授法の改善」につながっていききました。

私たち教師は、授業の中で子どもたちが生き生きと瞳を輝かせ、楽しく学んでいる姿に出会えたときに一番の幸せを感じ、元気になります。悩みや問題を抱えた生徒はどこかの中学校にもいます。そのような生徒にとって「少人数指導・習熟度別学習」は、学習の「楽しさ」や「充実感」を知る機会になるものです。根岸中学校では、すべての生徒が元気に学校に通えるよう取り組んでいます。「徹底して一人ひとりを大切に」という本校のモットーを忘れることなく今後も全力で取り組んでいきます。